

## フツサル現象学による

# 幼少期の自我体験の解明から輪廻転生観へ

渡辺恒夫

### 一 幼少期の自我体験からの遙かなる出発

心を脳の機能とみなす科学者社会の定説からは、死後は虚無であるという結論は当然視される。しかしこの「定説」は、自己を多数の他者の中の一人の他者であるかのように、上空飛行的に俯瞰する架空の視点こそ「真の」視点であるという、虚構に基づいている。この虚構性に気づくのは容易でないが、幼少期の「体験」に基づいて虚構性を自然に洞察し、独自の死生観を築き上げる人もいる。この体験を「自我体験」と言い、臨床・発達心理学の片隅で研究が続けられている。この体験はフツサル現象学によって解明が試みられているが、自我体験から出発して輪廻転生の死生観に達する例があるのと並行的に、フツサル他者論もまた輪廻転生観を示唆し得る、というのが本論の論旨である。自我体験は一般には知られていないので、まず

例をあげる。

#### 【事例1 稲垣足穂】

俺はもっと人生を愛したい、味わいたい、面白いことをしたい。或は苦しみたい……など云って死にぎわに喚くには当たらないのである。自分がいま、ここにいるように、死んだら又、別ないま、この裡に閉じこめられるであろうことには、疑いはない。この論旨が薄弱だと考えるのは、未だ一度も「自分は何故他の誰かではないのか?」「何故たつたいま此処に居るのか?」について思いを凝らしたことの無い者共である。<sup>1)</sup>

稲垣足穂(一九〇〇〜一九七七)は『一千一秒物語』等で知られる特異な幻想作家。後半の二つの疑問文に自我体験が表現されている(前半では一種の輪廻転生観が表明されている)。現在、自我体験については、次のことが分かっている。

自我体験とは自己の自明性が突然に揺らぐ体験で、①驚き「私は私だ!」、②訝り「私は本当にX・Yなのか?」、③問いかけ「私はなぜここに居るX・Yであって他の誰かではないのか?」、④おののき(独我論的体験)「世界中で私であるのはX・Y一人なのでX・Yは唯一で、だから特別だ!」、という四要素のいずれかを備える。「④おののき」を独立させて独我論的体験と呼び、「自我体験・独我論的体験」と並置することもある。ここで自己の自明性とは、「私は多数のヒトの中の一人としてのX・Yである」という、常識的な自己知を言う(なお、「X・Y」には、各自自分の姓名を入れて読んでいただきたい)。青年心理学のシャルロツテ・ビューラーが「Ich-Erlebnis」の名の下に一九二〇年代に、現象学者スピーゲルバークが「I-am-me experience」の名の下に一九六〇年代に取り上げて以降は、二〇世紀末〜今世紀初頭より日本とオランダでのみ細々と調査研究がなされて来たが、自我体験の年齢分布は三歳〜一五歳、初発のピークは八歳〜一〇歳、大学生での回想報告率は二〇〜三〇%、年齢と共に記憶が衰微する等、最近になってほぼ全貌が明らかになりつつある<sup>4,5)</sup>。

【事例1 稲垣足穂】での自我体験は「③問いかけ」の要素が主になっているが、前半では、自我体験から展開したと見られる輪廻転生的な死生観が語られている。何歳頃からの信念であるかは明らかにされていないが、私は幼少期に遡るものと推測している。なぜなら私自身、似たような信念が幼少期からあ

り、一種の輪廻転生観に、そのような考えが世の中にあるということを知る前から到達していたから<sup>6)</sup>(従って本稿の背景をなす研究は、客観的な学問研究というより、自己の幼少期の体験の意味を解明するために「当事者研究」の色彩が強い)。自我体験は様々な方法で研究されているが、私はフッサールの心理学的現象学を現代心理学的に技法化してこの体験の解明を試み、「正常な精神発達過程で、主として児童期に生じることのある、自然発生的な現象学的還元」と定義し、「発達性エピソード」と名づけるに至っている<sup>7)</sup>。

## 二 人間の世界経験のパラドックス構造

上述の定義が示唆するところは、フッサールが現象学的還元の結果に『危機書』で遭遇した人間主観性のパラドックス(世界に対する主観であって同時に世界における客観であること)<sup>8)</sup>と同じパラドックスが、自我体験の深みにおいても出現する可能性である。次は、そのようなパラドックスが浮上しかけた事例である。

### 【事例2 二四歳女性／在アムステルダム】

九歳か一〇歳の頃のことでした。夜で、真つ暗闇でした。私はベッドに入っていました。眠れませんが……突然、どこからともなくある認識が私に訪れました。私は私。私は私であるこの世でたった一人の人間。私は、この認識が不意にやって来て、私をやや不安にさせたと思いま

す。私は自分のからだに閉じ込められたように、またか  
なり孤独に感じました。私はその夜考え続け、誰もがみ  
な自分自身なのだと思いましたが、それでもこの感覚  
は長く残りました<sup>5</sup>。

この事例で浮上しかけたのは、自己の唯一性の自覚（私は  
私であるこの世でたった一人の人間）と、他の等根源性の  
要請（誰もがみな自分自身）の間での、パラドックス構造で  
ある（当人が自覚しているか否かは別として）。誰もが自分  
のように唯一では、「唯一」が多数あることになって唯一ではな  
くなり、「世界に対する主観」であるはずが「世界における客  
観」になってしまう。日常的事態でもこのパラドックスが姿を  
覗かせることがある。——「私は自分がかけがえない唯一の  
存在だとわかった」↓「私にとってBさんはかけがえない唯  
一の存在である」↓「CさんもDさんも、各自にとってかけ  
がえない唯一の存在であり、おたがいにもかけがえない唯一  
の存在ではないだろうか？」↓「すると私たち地球八〇億の人  
間は全員が『かけがえない唯一の存在』という『類』を構成  
することになり、私たちはその『一例』ということになるから、  
私たちがかけがえのある存在に過ぎない？」これを私は、人間  
的世界経験の根源的パラドックス構造と呼ぶ<sup>6</sup>。

### 三 『デカルト的省察』における他者論

パラドックスから脱出するには、「誰もがみな自分自身なの

だ」ということを私はなぜ確信するのか、解明する必要がある。  
つまり、「他者論」の必要性である。事実フッサールは、『危機  
書』に先だって『デカルト的省察』<sup>10</sup>の中で、間主観性論の名の  
下にこれを試みている。そこでは、私が生まれながらのロビン  
ソン・クルーソーであつて他者という存在を未だ知らないと思  
定することから出発する、一種の思考実験が行われる。それは  
次のように要約できる。①他者を示唆する一切を括弧入れする  
エポケーを敢行する。②このエポケーを受けた世界の中心、「絶  
対のここ」に、一つの身体が位置している。③一つの「物体」  
が「そこ」に現れる。物体は〈ここ〉に居る身体に似ているゆ  
え、「対化」の現象が起り、そこにある物体へと、ここに居  
る身体から「身体」の意味が移送される。この過程を類比的  
統覚と言う。④この「そこに在る身体」を自己の身体とする他  
者と、他者にとっての現象世界とは、私と私にとっての現象世  
界の「志向的変様」として現れる。志向的変様とは、「ちよう  
ど私がそこに居る時のように」そこから現象的世界がひらけ、  
その中心としての身体を〈ここ〉とする「他の私」（他我）が  
構成されるということと考えてよい。フッサールは、ある身体  
を〈ここ〉としてそこから開ける現象世界のことを、モノドと  
言っている。他者のモノドは私のモノドの志向的変様である。

上記の他者論でキーワードとなるのが、〈ここ〉（絶対のここ）  
である。「そこ」に居るに過ぎない他者の身体を、他の〈ここ〉  
として一挙に構成するのが、フッサール他者論の眼目である。

「ここ」という表現は、自我体験回想においても、しばしば出現する。冒頭の「事例1 稲垣足穂」にも、「ここ」「此处」の表現が三回出現している。

#### 四 ヘルトによるフッサール他者論の内在的批判

フッサールのこの他者論には批判が多い。即座に思いつくのは、多数のモナドの同時的並存を認めてしまうと、現象学的態度によって克服したはずの、諸モナドを上空飛行的に俯瞰するような世界像に舞い戻ってしまうのではないか、ということであろう。フッサールが『危機書』でパラドックスと言っているのも、このことを自覚したのだと思われる。

これに対して私は、諸モナドは同時に空間的に並存するのではなく時間を異にして存在するという、「フッサール他者論の時間差解釈」を試みる<sup>(1)</sup>。そのヒントとなったのは、クラウス・ヘルトによる、フッサール他者論への「内在的」批判である<sup>(2)</sup>。それを極めて平易に言い直すと次のようになる。——私の体験世界と同じような体験世界が、「そこ」にある「山田花子」の身体を「ここ」としてひらかれていると私は確信する。この確信はどこから来るか。フッサールはそれを、二種の志向的意識の協働作業によるとした。第一に、「あたかも私が今、そこにいるかのよう」(als ob ich dort wäre)「想像することであり、私の身体が現に山田花子の身体であって私は山田花子である」と想像することである。けれども私はこれが想像に過ぎず虚構

であると知っている。そこで第二に、「私がそこにいる時に」(wenn ich dort bin)そこを「ここ」として体験世界がひらけるという、時間的仮定に基づく想定意識をフッサールは付け加えた。けれども私が現にそこにいない以上、私が「そこ」を「ここ」としているのは、過去か未来かになってしまう。ましてこれを、私が過去か未来かに、「山田花子であった・であるだろう」と想定する、という意味に取らねばならないとすると、ますますおかしな想定である。このように異質的である第一の志向的意識と第二の志向的意識とをいくら協働させても、他者の実在の確信が生成するとは思えない。

#### 五 フッサール他者論の時間差解釈から 輪廻転生観へ

ヘルトは、だからフッサール他者論はダメだと言って、代替案を提案する。けれども私は、このヘルトによる批判を、「フッサール他者論の批判的再構成」として、あえて字義通りに受容したい。なぜならこの説は、他者経験が単一の直観などではなく、二層から成ることを暗に示しているから。第一の層は感情移入(共感)対象としての他者であり、共感の発達心理学研究の一大トピックスとなっている。が、私が自己の唯一性を自覚することでこの層の他者の虚構性も自覚されるので、独我論的体験のきっかけとなってしまう。そこに出現する第二の層こそ、「私が過去か未来かに『山田花子であった・であるだろう』

と想定する」志向意識が働く層である。「私の過去・未来としての他者」を予兆させる層である。

そもそも、「絶対のここ」と等根源的な「他のここ」としての他者を理解可能にする唯一の途は、「他のここ」は、かつて／いつか、「此処のここ」だった／になるだろう」であり、分りやすく言えば「私は過去か未来かに、そこにいる山田花子であった／であるだろう」ではないだろうか。従って、第二の層における「時間的仮定に基づく想定意識」にこそ、〈自己の唯一性 vs 自他の等根源性〉のパラドックスからの脱出口があるのではないか。無論、多数の他者が私と同時代に並存している以上、「私は過去か未来にそれらの他者たちであった／であるだろう」という事態は、理解不可能に思われるかもしれない。けれども哲学的分析によると、第三者による外的視点が取れない以上、主観的な自己と主観的な他者の同時性は保証されない<sup>③</sup>。ならば同時代他者を、時間を異にした自己と理解することは、決して無意味ではないであろう。フッサル自身、他我をしばしば「自我の時間化」と言っているように、志向的意識の構造で他者に最も近い存在は、「いかなる記憶もない過去のある日の私」である。ゆえに、他者とは、「もはや想起できない／未だ予期できない」私である、ということになるろう。他者とは時間を異にした私だとは、輪廻転生観ではないだろうか。このような死生観の展開は、西洋人フッサルにもヘルトにも想像の埒外だった違いはない。このような展開は日本でしかでき

ない。なぜなら、①自我体験研究が持続的になされている殆ど唯一の国である、②フッサル研究ではドイツに次ぐ水準にある、③輪廻転生観になじみがある、という最適条件に恵まれているのだから。

## 六 展 望

自我体験の深みで出会う人間的経験のパラドックス構造を突破するのは、唯一の〈ここ〉としての私と等根源的な他者は、時間を異にした〈ここ〉であり当該の他者として生を受けた〈私〉である、という飛躍である。「事例1 稲垣足穂」に見る輪廻転生観も、このことを示していると思われる。けれども、同時代者を含む全ての等根源的な他者を私の輪廻転生する姿とみなすという「遍在転生観<sup>④</sup>」を推し進めるには、人格の同一性(私の同一性)についての全く新たな考えを要する。確率論<sup>⑤</sup>、可能世界論、物語論に手掛りが求められるとは言え、前途には厳しいものがある。にもかかわらずそれが、「唯一の自己と等根源的な他者」という不可能性を可能にする、唯一の途であると思われる。

(1) 稲垣足穂「兜率上生」『稲垣足穂大全 第4巻』三五二―三六〇頁、現代思潮社、一九七三年。

(2) ビューラー、Ch.『青年の精神生活』[一九二二年]原田茂訳、共同出版、一九六九年。

(3) Spiegelberg, H. "On the 'I-am-me experience' in childhood and ado-

Isensee". *Psychologia*, vol.4, 135-146, 1961.

- (4) 渡辺恒夫・高石恭子編『私』とこう謎——自我体験の心理学』新曜社、二〇〇四年。
- (5) コーンスタム、D. 『子どもの自我体験』二〇〇四年』渡辺恒夫・高石恭子訳、金子書房、二〇一六年。
- (6) 渡辺恒夫『輪廻転生を考える——死生学のかなたへ』講談社現代新書、一九九六年。
- (7) 渡辺恒夫『フッサール心理学宣言——他者の自明性がひび割れる時代に』講談社、二〇一三年。
- (8) フッサール、E. 『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』一九五三年』（細谷恒夫・木田元訳、中央公論社、一九九二年）の第五三節以下参照。
- (9) 発達心理学的には、四〜五歳で「多数のヒトの中の一人」としての自己理解が成立した後に、内省能力の発達によって「唯一の自己」の自覚が生じ、その間の矛盾の意識がパラドクスの自覚となる、と説明できる（拙稿「パーソナリティの段階発達説・第二の誕生とは何か」『発達心理学研究』22、四〇八—四一七頁、二〇一一年）。このあたり心理学的知見と超越論的議論が混濁されていると批判されるかもしれない。けれども私は、両者の区別は絶対的なものではなく、心理学的現象学を深めれば超越論的問題に突き当らざるを得ないし、逆に後者の解決に心理学的知見が役立つこともあるというように、両者は認識論的循環の関係にあると考える。
- (10) フッサール、E. 『デカルト的省察』二一九七七年』浜渦辰二訳、岩波文庫、二〇〇一年。
- (11) 渡辺恒夫「フッサール他者論の時間差解剖」<http://phsc.jp/dar/frsm/20130616ama4.pdf> 科学基礎論学会二〇一三年度総会と講演会（於、大阪大学）、二〇一三年。
- (12) ヘルト、K. 「相互主観性の問題と現象学的超越論的哲学の理念」二一九七年』（坂本満訳）ロムパツハ・リクール・ラントグレーベ他、新田義弘・村田純一編訳『現象学の展望』（一六五—二一九頁）、国文社、一九八六年。
- (13) 青山拓央「客観的現在と心身相関の同時性」『科学基礎論研究』33、二五—二九頁、二〇〇五年。
- (14) 渡辺恒夫『私の死』の謎』ナカニシヤ出版、二〇〇二年。  
(わたなべ・つねお、心理学・現象学、東邦大学名誉教授)